

本年五月、平成から令和に御代が移行した。平成時代は三〇年間であったから、生物としての人間の世代交代の期間に大略対応している。それ以外に、人間が利用する技術により区分する世代交代がある。自転車が主要な移動手段であった世代と自動車を普通に利用してきた世代とは、日常生活圏の概念が相違しているというのが一例である。

アメリカでは子供時代に体験した情報手段による世代区分が浸透している。一九六〇年代に誕生した世代は情報の受信はテレビジョン、発信は固定電話が中心で「X世代」と名付けられている。この時代の映画には居間で一家がテレビジョン番組を鑑賞し、友人とは電話で情報交換する場面が普通に登場していた。一九七〇年代後半になると、アップルⅡを代表とするパーソナルコンピュータが出現し、しばらくすると音響力プラを仲介して電話回線経由でデータ通信が可能になったため、コンピュータ通信によって情報の収集や発信をする世代が誕生し、「Z世代」別名「デジタル・パイオニア」と命名されるようになる。

一九九〇年代に誕生した子供はインターネットと高度な機能のパーソナルコンピュータが最初から身近に存在し、しかも安価で使用できるため、それらを駆使する「デジタル・ネイティブ」となるとともに、同時多発テロ事件やリーマンショックのような経済事件を経験し、社会への関心がある「Z世代」に成長していく。

Zまで到達し、これからどうなるかと心配していたところ「C世代」という時代区分が登場してきた。これはカスタマイズ、自分の趣味や思想に合致するように情報を編集するという意味である。携帯電話など高度な情報端末と安価なインターネット回線により、膨大な情報から自分で選択して編集する世代という意味である。

アップルミュージックでは月額一〇〇〇円程度で五〇〇〇万曲の音楽から選択でき、キンドルでは同様の金額で一二〇万冊の書籍から選択できるというサブスクリプション（定額購入）が登場し、モノについても多種多様な衣服から選択して必要なときだけ賃借するサービスなどが出現し、自由に編集することが可能になってきた。

ここまでは消費生活の転換であるが、重要な指摘は政治にも編集を可能にする構造が登場してきたことである。多数の国々では保守と革新という二大政党で政治体制が形成されていたが、現在、国会に議席をもつ政党だけでも日本には一〇存在し、フランスでは一一、イタリアでは一八、ドイツでは七という状態である。

アメリカでは次期大統領選挙に民主党候補者が二六人という現状もC世代が中心となった社会を反映している。この乱立とも表現できる状況の背後にあるのがツイッター、スナップチャット、フェイスブックなどSNSと総称される通信手段であり、トランプ大統領を筆頭に各国首脳がSNSでメッセージを伝達する時代である。

この傾向はマスメディアの広告収入にも反映しており、雑誌、ラジオ放送、新聞の順番でインターネットに凌駕され、テレビジョン放送の陥落も間近である。社会の大勢を提示していたマスメディアがSNSなどの断片情報に追放され、自分の趣味や気分編集していく社会は多様という意味では価値があるとしても、焦点のない社会になりかねない。